

2022.6.1

久保田 博南

## ビー玉とコーヒー

### －記憶の連鎖－

最近、土曜日に限って、老妻と近所のファミレスで朝食を取ることにしている。先日、二階に寝ている孫娘が早起きして下に降りてきたついでに、私も行きたいというので連れて行ったことがある。その帰り道、「おじいちゃん、何か買って」というので、文房具ならいいと言ってみた。

少し寄り道すれば、老舗の文房具屋さんがあるのを知っていて、それなら行ってみようということになった。「でも、こんなに早く開いているかな」「無理かも知れないね」などと話しながら前まで行くと、シャッターが上がっていて、入り口のドアが半開きになっている。中を覗き込むと、初老のご主人が、引き出ものに包装紙をかけているようだった。

こちらの様子を察したのか、「どうぞ」ということばが返ってきた。喜んだ孫娘は、消しゴムとビー玉を手にとってしまったので、200円そこそこの代金を支払った。すると、ご主人、ビニール袋を取り出し、「邪魔にならないようなら使ってください」という。昨今、レジ袋とやらは有料となっているのに、そこまでサービスしては商売にならないだろうと感じたが、折角なので「ありがとうございます」と言って袋に入れてもらった。

ビー玉が文房具だと断定する人はあまり多くないと思うが、この際、誤差範囲としておこう。私が持っている手提げ袋にビニール袋を入れようとする、孫娘は「私が持って行きたい」と言い出して、乗ってきたスクーターのハンドルに引っ掛けて、嬉々として帰路をこぎ出した。

「開いててよかったネ」といっていたが、それより、この店のご主人の親切心に感謝した。この一つの親切が、また「文房具」が必要になったらここで買いたいものだという気持ち起こさせる。

そのことがあってから、この「どうぞ」という短いことばに繋がる一つのシーンが蘇ってきた。

もう4半世紀も前になるのだが、妻と妻の友人との3人でドイツ旅行に出かけたときのこと。ロマンテック街道のハイライトと言われるローテンブルグに宿を取ったときのことだ。中世のヨーロッパの街並みが味わえるというキャッチコピーそのままに、時間を後戻りするような感覚が味わえる。



街を周回するという観光馬車は、レンガを敷き詰めた道をガタガタと音を立てて、20分余りで元の中央広場に戻ってきてしまう。よく考えてみると、馬車に乗ったのは長い人生でも初体験だが、決して快適とはいいがたい。

夕方、散歩に出かけた2人をよそに、メイン道路端の parasol の下でドイツビールのジョッキを傾けていた。何百年もの時間を引き継いで、伝統的な街並みを見ながら「至福の時間」を満喫することができた。

翌朝のこと、まだ薄暗い時間だったが、通りに面した宿の外を眺めている時だった。日本人観光客と思われる4人連れが、向かいのケーキ屋兼喫茶室のウインドウを眺めていた。このときもドアが半開きになっていて、店主が中で開店の準備中だった。当然のことながら、というのが適当だろうが、喫茶室のほうも開いているはずがない。「まだコーヒーは飲めないよネ」という声が聞こえてきた。

と、どうだろう。奥にいた店主がこの空気を察して、「ビッテ」といったのだ。4人連れのリーダー役が「カフェー？」と聞くと、再び「ビッテ」が返ってきた。これを聞いて、「いいそうだよ」と意気揚々として4人が喫茶室の中に消えていった。こんな時間に、古都の老舗で「夜明けのコーヒー」にありつけるなんて、何という幸運なのか。ダメもとで聞いてみるみるもんだ、、、さぞかし、美味しいコーヒーだろうに、、、

「どうぞ」と「ビッテ」、早朝、開店前、予想外の親切、だが、いずれも遠く離れた「とき」と「ところ」、それに大きく違うシチュエーションとはいえ、ビー玉とコーヒーが結びいたのだ。人の記憶の連鎖がどういうメカに基づいているのかわからないが、もしかしたら、記憶というのは「連鎖が絡み合う」という法則に基づいているのかも知れない。